

博 士 論 文 (要 約)

論文題目 日本神学の形成——近世日本における『神皇正統記』の受容史

氏 名 齋藤 公太

日本神学の形成——近世日本における『神皇正統記』の受容史

目次 凡例

序論

第一節	問題の所在	四頁
第二節	国家神道の研究史	七頁
第三節	「日本神学」という視座	一〇頁
第四節	『神皇正統記』の受容史という問題	一九頁
第五節	本論文の構成	二二頁

第一章 日本神学の叢生——『神皇正統記』の言説構造 はじめに

第一節	『神皇正統記』の研究史	二二頁
第二節	『正統記』における日本神学	二四頁
第三節	『正統記』における宗教論	二六頁
第四節	『正統記』における歴史論	三一頁
第五節	『正統記』における「正統」論	三四頁
おわりに		三七頁
		四〇頁

第二章 近世前中期における『神皇正統記』の受容史 第一節 室町・戦国期における『正統記』受容

四三頁
四三頁

第二節	近世日本の歴史的條件	四六頁
第三節	『正統記』受容の二類型	五一頁
第四節	林羅山における『正統記』受容	五五頁
第五節	山鹿素行における『正統記』受容	五七頁
第六節	新井白石における『正統記』受容	六一頁

第三章 神器と正統——閭斎学派の南朝正統論 はじめに

第一節	山崎闇斎の南朝正統論	六六頁
第二節	正統と「理」	六八頁
第三節	神器正統論の興隆	七三頁
おわりに		七七頁
		八二頁

第四章 不可視の「神皇」——若林強斎の祭政一致論 はじめに

第一節	神道相伝まで——第一期	八五頁
第二節	神道相伝の直前からそれ以後にかけて——第二期	八七頁
第三節	最晩年の思想——第三期	九三頁
おわりに		九七頁
		九九頁

第五章 「本来性」をめぐる闘争——前期水戸学における神器論争 はじめに

一〇一頁
一〇一頁

第一節	神器論争の背景	一〇二頁
第二節	栗山潜鋒	一〇七頁
第三節	三宅観瀾	一一一頁
	おわりに	一一七頁
第六章	歴史主義の興隆——垂加神道における『古事記』研究と「神道」概念の再構築	
第一節	歴史主義という「知」	一二〇頁
第二節	垂加神道における『古事記』研究——神典解釈の問題を中心に	一二〇頁
第三節	垂加神道における『古事記』観	一二六頁
第四節	大山為起の『古事記』研究	一二七頁
第五節	洪川春海と谷秦山の『古事記』研究	一二九頁
第六節	岡田正利の『古事記』研究	一三五頁
第七節	徂徠学派の神道批判	一三九頁
第八節	「神道」概念の再構築	一四四頁
第九節	本居宣長の古道論	一四九頁
第七章	「国体」の生成——後期水戸学における『正統記』の受容	一五七頁
	はじめに	一六四頁
第一節	藤田幽谷の『正統記』受容と「国体」論	一六四頁
第二節	幽谷門流の『正統記』受容	一六六頁
		一七一頁

第三節	会沢正志斎の『正統記』受容	一七三頁
第四節	藤田東湖の『正統記』受容	一八〇頁
	おわりに	一八五頁

第八章 日本神学の近代——明治期の『神皇正統記』受容史

第一節	明治期の『正統記』受容史という課題	一八七頁
第二節	川喜多真彦の『評註校正神皇正統記』	一八七頁
第三節	明治期の『正統記』刊本・注釈書類の刊行とその背景	一八八頁
第四節	明治期における『正統記』解釈の特質	一九〇頁
第五節	井上毅と『神皇正統記』	一九五頁
		二〇三頁

結論		二一〇頁
-----------	--	------

参考文献		二一四頁
-------------	--	------

附録 明治期における『神皇正統記』の刊本・注釈書類一覧

(本文)

本博士論文（学位授与年月日：平成 29 年 3 月 2 日）は、全体の内容が下記の単行本として出版されているため、全文を公表することができません。

- ・ 著者名：齋藤公太
- ・ 題名：『「神国」の正統論——『神皇正統記』受容の近世・近代』
- ・ 出版社：ぺりかん社
- ・ 出版年：平成 31（2019）年
- ・ ISBN：9784831515322

参考文献

一次資料

会沢正志斎『下学邇言』会沢善、一八九二年。
会沢正志斎「古詩十二首」、寺門謹編『閑道篇』上所収、国光社、一八九二年。
会沢正志斎『読直毘霊』、関儀一郎編『日本儒林叢書 第四冊 論弁部』所収、東洋図書刊行会、一九三四年。
会沢正志斎『及門遺範』、菊池謙二郎編『幽谷全集』所収、吉田彌平、一九三五年。
会沢正志斎（塚本勝義校注）『迪彝篇』、『新論・迪彝篇』所収、岩波文庫、一九四一年。
会沢正志斎『新論』、『日本思想大系五三 水戸学』所収、岩波書店、一九七三年。
会沢正志斎『退食間話』、『日本思想大系五三 水戸学』所収、岩波書店、一九七三年。
会沢正志斎『草偃和言』、神道大系編纂会編刊『神道大系 論説編十五 水戸学』所収、一九八六年。
会沢正志斎『三器集説序』、名越時正編『会沢正志斎文稿』所収、国書刊行会、二〇〇二年。
安積澹泊「保建大記跋」、『保建大記』、『日本思想大系四八 近世史論集』岩波書店、一九七四年。
安積澹泊『大日本史賛藪』、『日本思想大系四八 近世史論集』所収、

岩波書店、一九七四年。

浅見綱斎述（沼田宇源太編）『靖献遺言講義』昭文堂、一九一一年。
浅見綱斎『中国弁』、『日本思想大系三一 山崎闇斎学派』所収、岩波書店、一九八〇年。

浅見綱斎述『靖献遺言講義』、近藤啓吾・金本正孝編『浅見綱斎集』所収、国書刊行会、一九八九年。

『浅見先生学談』、近藤啓吾・金本正孝編『浅見綱斎集』国書刊行会、一九八九年。

味池修居著（内田周平編）『南狩録』文成社、一九三一年。

味池修居『三種神器不墜賊手論』（伝記学会編『増補 山崎闇斎と其門流』（明治書房、一九四三年）から再引用）。

跡部良顕「正行筆記跋」、『韞蔵録』卷之七）、日本古典学会編『佐藤直方全集』第一卷所収、ぺりかん社、一九七九年。

跡部良顕『南山編年録』一九二五年謄写本、東京大学史料編纂所所蔵。

跡部良顕『三種神器集説』寛保九（一七二四）年写本、鶴舞中央図書館河村文庫所蔵。

跡部良顕『三種神器伝書』享保九（一七二四）年写本、公益財団法人永青文庫所蔵、熊本大学附属図書館寄託。

天野信景『改正続神皇正統記』、『史料叢書』卷三所収、近藤瓶城、一八八三年。

新井白石（村岡典嗣校訂）『読史余論』岩波文庫、一九三六年。

新井白石『読史余論』、『日本思想大系三五 新井白石』所収、岩波

書店、一九七五年。

新井白石『古史通』、国書刊行会編刊『新井白石全集』第三卷所収、一九七七年。

新井白石『古史通或問』、国書刊行会編刊『新井白石全集』第三卷所収、一九七七年。

新井白石『殊号事略』、国書刊行会編刊『新井白石全集』第三卷所収、一九七七年。

「安政三（一八五六）年十二月二十八日付、松平慶永宛徳川斉昭書簡」、『水戸藩史料』別記卷二十四所収、吉川弘文館、一九一五年。

安藤為章『年山紀聞』、『日本随筆大成（第二期）』第十六卷所収、吉川弘文館、一九七四年。

池辺義象『日本文学史』金港堂、一九〇二年。

池辺義象「梧陰存稿の奥に書きつく」（『梧陰存稿』）、井上毅伝編纂委員会編『井上毅伝 史料篇第三』所収、國學院大學図書館、一九六九年。

伊藤博文『憲法義解』岩波文庫、一九四〇年。

井上玄桐撰『玄桐筆記』、水戸史学会編『水戸義公伝記逸話集』所収、常盤神社、一九七八年。

井上玄桐撰『御意覚書』、水戸史学会編『水戸義公伝記逸話集』所収、常盤神社、一九七八年。

井上毅「教育勅語意見」、井上毅伝記編纂委員会編『井上毅伝 史料篇第二』所収、國學院大學図書館、一九六八年。

井上哲次郎・有馬祐政共編『武士道叢書 中巻』博文館、一九〇五

年。

伊勢貞丈『神道独語』、山口察常編『日本精神文献叢書 第八巻 神道篇下』所収、大東出版、一九三八年。

今泉定介講述『神皇正統記講義』誠之堂、一八九六年。

今井有順「三部本書弁」（『神道集成』）、神道大系編纂会編刊『神道大系 首編一 神道集成』所収、一九八一年。

斎部広成撰（西宮一民校注）『古語拾遺』岩波文庫、一九八五年。

『往復書案』、茨城県立歴史館編『茨城県史料近世思想編 大日本史編纂記録』所収、茨城県、一九八九年。

内村鑑三『時勢の觀察』、『内村鑑三全集』第三巻所収、岩波書店、一九八二年。

正親町公通述、伴部安崇録『正親町公通卿口授』、佐伯有義校訂『大日本文庫神道篇 垂加神道』上巻所収、春陽堂、一九三五年。

正親町公通（内田周平編）『無窮紀』谷門精舎、一九三六年。

正親町公通述、伴部安崇録『正親町公通卿口訣』、山本信哉編『神道叢説』所収、ゆまに書房、一九九三年。

大久保初雄『古事記講義』上巻、図書出版株式会社、一八九三年。

大久保千濤編『神代温義』高知県神職会、一九四〇年。

大町桂月校訂『南朝史伝』至誠堂、一九一一年。

大山為起『味酒講記』書写年不明写本、国文学研究資料館所蔵。

岡田正利『古事記事跡抄』書写年不明写本、無窮会専門図書館・神習文庫所蔵。

岡田正利『先代旧事本紀事跡抄』書写年不明写本、無窮会専門図書館

館・神習文庫所蔵。

岡田正利『日本書紀事跡抄』書写年不明写本、無窮会専門図書館・神習文庫所蔵。

岡田正利『磯波書目』、谷省吾監修、吉崎久編『岡田磐齋・磐鎮父子藏書目録』所収、皇學館大學神道研究所、一九八五年。

荻生徂徠『徂徠先生答問書』、島田虔次編『荻生徂徠全集』第一卷所収、みすず書房、一九七三年。

荻生徂徠『太平策』、『日本思想大系三六』荻生徂徠所収、岩波書店、一九七三年。

荻生徂徠『弁道』、『日本思想大系三六』荻生徂徠所収、岩波書店、一九七三年。

荻生徂徠『弁名』、『日本思想大系三六』荻生徂徠所収、岩波書店、一九七三年。

荻生徂徠『旧事本紀解序』（『徂徠集』）、『日本思想大系三六』荻生徂徠所収、岩波書店、一九七三年。

小槻晴富『続神皇正統記』、『群書類従第三輯 帝王部 卷三〇』所収、続群書類従完成会、一九三三年。

小野高潔『古事記註裏書』、吉澤義則編『未刊国文古註釈大系』第一二卷所収、清文堂出版、一九六八年。

折口信夫「神道宗教化の意義」、折口博士記念古代研究所編『折口信夫全集』第二十卷所収、中央公論社、一九六七年。

加藤堯敬撰、小中村義象校閲『神皇正統記読本義解』田沼書店、一九七七年。

金子堅太郎「帝国憲法制定の精神」、『帝国憲法制定の精神』欧米各
国学者政治家の評論』所収、文部省、一九三五年。

加藤周一『日本文学史序説』上巻、ちくま学芸文庫、一九九九年。
賀茂真淵『国意考』、『日本思想大系三九』近世神道論 前期国学』

所収、岩波書店、一九七二年。
河上徹太郎『日本のアウトサイダー』、『河上徹太郎著作集』第五卷

所収、新潮社、一九八一年。
川崎紫山訳註・大日本史普及会編『訳註大日本史』第二巻、大日本

史普及会、一九六四年。
『官報』二二〇三号、一八九〇年一〇月三十一日。

『官報』三一八九号、一八九七年三月一日付。

北畠親房『神皇正統記』井上毅旧蔵本、國學院大學附属図書館・梧
陰文庫所蔵。

北畠親房『神皇正統記』栗山潜鋒旧蔵本、國學院大學附属図書館・梧
陰文庫所蔵。

北畠親房（川喜多真彦校注）『評註校正神皇正統記』永田調兵衛・勝
村治右衛門・藤井孫兵衛・大谷仁兵衛、一八六六年。

北畠親房（佐伯有義・三木五百枝標註校正、内藤耻叟校閲）『校正評
註神皇正統記』青山幸次郎、一八九一年。

北畠親房（飯田武郷・久米幹文校訂、服部元彦補助）『校訂神皇正統
記』国語伝習所、一八九一年。

北畠親房（斎藤普春校注）『纂註神皇正統記校本』同志会、一八九一
年。

北畠親房（今泉定介・畠山健訂正標註）『訂正標註神皇正統記』普及
舎、一八九二年。

北畠親房（大宮宗司校注、内藤耻叟校閱）『校註神皇正統記』博文館、
一八九二年。

北畠親房『神皇正統記（群書類從 第貳輯）』經濟雜誌社、一八九三
年。

北畠親房（関根正直校注）『教科適用国文叢書 神皇正統記』六合館、
一八九四年。

北畠親房（大久保初雄補注）『補注神皇正統記』岡本仙助・岡本宇野
（図書出版）、一八九五年。

北畠親房（金子元臣刪訂、畠山健校閱）『神皇正統記読本（中等教育
国文読本 第五編）』明治書院、一八九七年。

北畠親房（加藤堯敬撰、小中村義象校閱）『神皇正統記読本』田沼書
店、一八九七年。

北畠親房（東京高等師範学校附属中学校国語漢文研究会編）『国文読
本神皇正統記抄』宝文館、一九〇八年。

北畠親房『神皇正統記（十銭文庫 第四編）』百華書房、一九一二年。

北畠親房（境野正編）『神皇正統記』学海指針社、一九一二年。

北畠親房（芳賀矢一校訂）『神皇正統記（袖珍名著文庫 四十五卷）』
富山房、一九一一年。

北畠親房（村上寛註釈、宝文館編輯所編）『頭註神皇正統記（国漢文
叢書）』宝文館、一九一二年。

書類從完成会、一九六〇年。

北畠親房（岩佐正校注）『神皇正統記』、『日本古典文学大系八七
皇正統記 増鏡』所収、岩波書店、一九六五年。

北畠親房（岩佐正校注）『神皇正統記』岩波文庫、一九七五年。

北畠親房『古今和歌集註』、神道大系編纂会編刊『神道大系 論説編
十九 北畠親房（下）』所収、一九九二年。

北畠親房『元元集』、神道大系編纂会編刊『神道大系 論説編十九
北畠親房（上）』、一九九一年。

『北畠親房卿御伝記』嘉永三（一八五〇）年写本、宫内庁書陵部図
書寮文庫所蔵。

熊澤蕃山『集義和書』、『日本思想大系三〇 熊沢蕃山』所収、岩波
書店、一九七一年。

『綱翁答跡部良賢問書』、倉本長治編『近世社会経済学説大系七 浅
見綱斎集』所収、誠文堂新光社、一九三七年。

栗山潜鋒書込本『神皇正統記』卷之一、慶安二（一六四九）年刊本、
東京大学附属総合図書館所蔵。

栗山潜鋒『保平綱史』明治十九（一八八六）年写本、東京大学史料
編纂所所蔵。

栗山潜鋒『保建大記』、『日本思想大系四八 近世史論集』所収、岩
波書店、一九七四年。

建国記念事業協会・彰考舎編刊『訳註大日本史』第四卷、一九三九
年。

契沖『厚顔抄』、『契沖全集』第七卷所収、岩波書店、一九七二年。

『古事記新疏』書写年不明写本、京都大学附属図書館所蔵（松岡叢書）。

『古事記』寛永二一（一六四四）年版本（本居宣長手沢本）、本居宣長記念館所蔵。

小中村清矩「神道」『陽春盧雜考』卷之六所収、吉川半七、一八九八年。

小中村清矩「古典講習科開業演説案」『陽春盧雜考』卷之八所収、吉川半七、一八九八年。

小中村義象述『国文講義（尋常師範学科講義録）』明治講学会、一八九四年。

金地院崇伝「排吉利支丹文」『日本思想大系二五 キリシタン書 排耶書』所収、岩波書店、一九七〇年。

佐々木高成『弁弁道書』、『大日本文庫 神道篇 垂加神道』下巻所収、春陽堂書店、一九三七年。

佐々政一・山内次郎編『近古文選』新潮社、一九〇九年。

『筭録』『日本思想大系三二 山崎闇齋学派』所収、岩波書店、一九八〇年。

佐藤一斎『言志晩録』、『日本思想大系四六 佐藤一斎 大塩中斎』所収、岩波書店、一九八〇年。

佐藤直方「正行筆記」、『韞蔵録』卷之七所収、日本古典学会編『佐藤直方全集』第一卷、ぺりかん社、一九七九年。

佐藤直方『中国論集』、『韞蔵録』卷之十四所収、日本古典学会編『佐藤直方全集』第一卷、ぺりかん社、一九七九年。

佐藤直方述『学談雜録』日本古典学会編『増訂佐藤直方全集』第一卷、ぺりかん社、一九七九年。

『持授抄』、『日本思想大系三九 近世神道論 前期国学』岩波書店、一九七二年。

『三種神器秘伝』山本信哉編『神道叢説』所収、ゆまに書房、一九九三年。

『三種神器秘伝』享保九（一八二四）年筆記、公益財団法人永青文庫所蔵、熊本大学附属図書館寄託。

朱熹『四書章句集注』中華書局出版、一九八三年。

『小学校師範学校中学校高等女学校検定済教科用図書表（自明治四十四年四月一日至明治四十五年三月二十日）』、中村紀久二編『教科書研究資料文獻 第五卷 検定済教科用図書表（三）』所収、芳文閣、一九八五年。

『心学五輪書』、『日本思想大系二八 藤原惺窩 林羅山』岩波書店、一九七五年。

『神代卷藻塩草』元文四（一七三九）年刊本。

瑞溪周鳳『善隣国宝記』田中健夫編『訳注日本史料 善隣国宝記・新訂続善隣国宝記』集英社、一九九五年。

『枢密院会議議事録』第一卷、東京大学出版会、一九八四年。

鈴木行義『神道書目集覧』山本信哉編『神道叢説』所収、国書刊行会、一九一一年。

『続垂加文集』日本古典学会編『新編山崎闇齋全集』第二巻所収、ぺりかん社、一九七八年。

関根正直「国史の精神」、國學院編『国史論纂』所収、大日本図書、一九〇三年。

園田新吾「天皇觀」、岡本太郎編『園田新吾十五年祭記念 維新の信條』所収、中井勝彦、一九七二年。

「大日本史を進むる表」、神道大系編纂会編刊『神道大系 論説編五 水戸学』所収、一九八六年。

『太平記評判秘伝理尽鈔』第二六冊、正保二（一六四五）年刊本。

竹内式部述『中臣祓講義（附）奉公心得書』岩波文庫、一九四一年。

太宰春台『弁道書』、鷺尾順敬編『日本思想闘争史料』第三卷所収、名著刊行会、一九六九年

多田義俊『蓴菜草紙』、日本随筆大成編輯部編『日本随筆大成（第二期）一四』所収、吉川弘文館、一九七四年。

谷秦山・洪川春海『古事記問批（古事記問目）』自筆本、高知県立高知城歴史博物館・山内文庫所蔵。

谷秦山注釈『保建大記打聞』享保五（一七二〇）年刊本。

谷秦山『秦山集』谷干城、一九一〇年。

玉木正英『玉籤集』、『大日本文庫 神道篇 垂加神道』上卷所収、春陽堂、一九三五年。

『中学校教授要目』鍾美堂、一九〇二年。

東京大学史料編纂所編『大日本近世史料 廣橋兼胤公武御用日記八』東京大学出版会、二〇〇七年。

東京大学法理文三学部編『東京大学法理文三学部一覽 從明治十五

年至明治十六年』丸家善七、一八八二年。

『桃源遺事』水戸史学会編『水戸義公伝記逸話集』所収、常盤神社、一九七八年。

徳川光圀「梅里先生碑陰并銘」、徳川圀順編『水戸義公全集』上卷所収、水府明德会、一九七〇年。

徳川光圀『常山文集』、徳川圀順編『水戸義公全集』上卷所収、角川書店、一九七〇年。

徳富蘇峰『昭和国民読本』東京日日新聞社、一九三六年。

戸坂潤『日本イデオロギー論』、『戸坂潤全集』第二卷所収、勁草書房、一九六六年。

富永仲基『翁の文』、『日本古典文学大系 九七 近世思想家文集』岩波書店、一九六六年。

中村浩然（倉員正江翻刻）「翻刻『中村雜記』抄（一）」『近世文芸研究と評論』三五号、一九八八年二月。

中村浩然（倉員正江翻刻）「翻刻『中村雜記』抄（三）」『近世文芸研究と評論』三七号、一九八九年二月。

西田幾多郎『日本文化の問題』、『西田幾多郎全集』第九卷所収、岩波書店、二〇〇四年。

『日本古典文学大系 六七 日本書紀 上』岩波書店、一九六七年。

『日本古典文学大系 六八 日本書紀 下』岩波書店、一九六五年。

芳賀矢一述『国語講義 神皇正統記（大日本師範学会講義録）』大日本師範学会、刊行年不明。

萩野由之述『神皇正統記（大日本中学会二十九年第三学級講義録

国語科講義第一』大日本中学会、一八九六年。

『白玉粹言』、『松岡叢書』卷五十六所収、書写年不明、京都大学附属図書館所蔵。

林羅山『本朝神社考』、神道大系編纂会編刊『神道大系 論説編二十 藤原惺窩・林羅山』、一九八八年。

平泉澄「一の精神を欠く」『国史学の骨髓』所収、錦正社、一九八九年（初出一九二八年）。

平泉澄「歴史を貫く冥々の力」『国史学の骨髓』錦正社、一九八九年（初出一九二八年）。

平泉澄「松下村塾記講義」『先哲を仰ぐ』所収、錦正社、一九九八年。

藤田東湖『回天詩史』、菊池謙二郎編『新定東湖全集』所収、博文館、一九四〇年。

藤田東湖『続東湖随筆』、菊池謙二郎編『新定東湖全集』所収、博文館、一九四〇年。

藤田東湖『弘道館記述義』、『日本思想大系 五三 水戸学』所収、岩波書店、一九七三年。

藤田幽谷『正名論』、『日本思想大系 五三 水戸学』所収、岩波書店、一九七三年。

藤田幽谷「蒲生君蔵墓表」、菊池謙二郎編『幽谷全集』所収、吉田彌平、一九三五年。

藤田幽谷『幽谷封事拾遺』、菊池謙二郎編『幽谷全集』所収、吉田彌平、一九三五年。

藤田幽谷「皇朝史略序」、菊池謙二郎編『幽谷全集』所収、吉田彌平、

一九三五年。

藤塚知直『神学初会記』、『大日本文庫 神道篇 垂加神道』下巻所収、春陽堂、一九三七年。

「文政八（一二二五）年六月二十四日付、青山延干宛藤田幽谷書簡」、国立国会図書館参考書誌部編『国立国会図書館所蔵貴重書解題 第十四巻 書簡の部 第三 藤田幽谷書簡』所収、国立国会図書館、一九八八年。

増穂残口『神国増穂草』、神道大系編纂会編刊『神道大系 論説編二 増穂残口』所収、一九八〇年。

丸岡桂・松下大三郎共編『国文大観 歴史部二 雑』板倉屋書房、一九〇四年。

丸山眞男「日本の思想」『丸山眞男集』第七巻所収、岩波書店、一九九六年。

三宅観瀾『中興鑑言（打聞）』、物集高見編『新註皇学叢書』第十二巻所収、広文庫刊行会、一九二八年。

三宅観瀾『中興鑑言』、高須芳次郎編『水戸学大系第七巻 栗山潜鋒 三宅観瀾集』所収、水戸学大系刊行会、一九四一年。

三宅観瀾「保建大記序」『日本思想大系四八 近世史論集』所収、岩波書店、一九七四年。

室鳩巢『駿台雑話』、日本随筆大成編輯部編『日本随筆大成（第三期）6』吉川弘文館、一九七七年。

「明和四（一七六八）年二月二八日付、斎藤信幸宛賀茂真淵書簡」『賀茂真淵全集』第二三巻所収、続群書類従完成会、一九九二年。

本居宣長『宇比山踏』大野晋編集校訂『本居宣長全集』第一卷所収、筑摩書房、一九六八年。

本居宣長『古事記伝』大野晋・大久保正編集校訂『本居宣長全集』第九、十二卷所収、筑摩書房、一九六八、七四年。

本居宣長『宝暦二年以後購求謄写書籍 附書目』大久保正編集校訂『本居宣長全集』第二〇卷所収、筑摩書房、一九七五年。

山鹿素行『山鹿語類』広瀬豊編『山鹿素行全集 思想篇』第四卷所収、岩波書店、一九四二年。

山鹿素行『中朝事実』広瀬豊編『山鹿素行全集 思想篇』第一三卷所収、岩波書店、一九四〇年。

山縣太華『講孟荀記評語草稿』山口県教育会編『吉田松陰全集』第三卷所収、岩波書店、一九三九年。

山口春水『雑話筆記』神道大系編纂会編刊『神道大系 論説編十三 垂加神道(下)』所収、一九七八年。

山口春水『雑話続録』神道大系編纂会編刊『神道大系 論説編十三 垂加神道(下)』所収、一九七八年。

山崎闇斎『世儒剃髮弁』日本古典学会編『新編山崎闇斎全集』第一卷所収、ぺりかん社、一九七八年。

山崎闇斎『藤森弓兵政所記』日本古典学会編『新編山崎闇斎全集』第一卷所収、ぺりかん社、一九七八年。

山崎闇斎『垂加草』日本古典学会編『新編山崎闇斎全集』第一卷所収、ぺりかん社、一九七八年。

山崎闇斎『東鑑歴算改補序』日本古典学会編『新編山崎闇斎全集』

第一卷所収、ぺりかん社、一九七八年。

山崎闇斎『大和小学』日本古典学会編『新編山崎闇斎全集』第四卷所収、ぺりかん社、一九七八年。

山崎闇斎『神代記垂加翁講義』神道大系編纂会編刊『神道大系 論説編十二 垂加神道(上)』所収、一九八四年。

山崎闇斎『中臣祓風水草』神道大系編纂会編刊『神道大系 論説編十二 垂加神道(上)』所収、一九八四年。

山崎闇斎『垂加翁神説』神道大系編纂会編刊『神道大系 論説編十二 垂加神道(上)』所収、一九八四年。

山崎闇斎『垂加社語』(『垂加翁神説』)、神道大系編纂会編刊『神道大系 論説編十二 垂加神道(上)』所収、一九八四年。

山崎闇斎『倭鑑目録』(『垂加翁神説補遺』)、神道大系編纂会編刊『神道大系 論説編十二 垂加神道(上)』所収、一九八四年。

山崎闇斎『藤森弓兵政所記』(『風葉集首巻』)、神道大系編纂会編刊『神道大系 論説編十二 垂加神道(上)』所収、一九八四年。

『倭姫命世記』神道大系編纂会編刊『神道大系 論説編五 伊勢神道(上)』所収、一九九三年。

山本蕉逸『童子通』長澤規矩也編『江戸時代支那学入門書改題集成』第四集、汲古書院、一九七五年。

吉川幸次郎注釈『論語』上巻、朝日選書、一九九六年。

吉田兼俱『唯一神道名法要集』『日本思想大系 一九 中世神道論』、岩波書店、一九七七年。

吉田令世『声文私言』神道大系編纂会編刊『神道大系 論説編十五 水

戸学』所収、一九八〇年。

吉田令世『宇麻志美道』、梶山孝夫『吉田活堂の思想——江戸後期水戸の国学者』所収、筑波書林、一九八四年。

吉見幸和『神道大綱』書写年不明写本、東京大学文学部宗教学宗教史学研究室所蔵。

吉見幸和述「学規の大綱」、山本信哉編『神道叢説』所収、国書刊行会、一九一一年。

吉見幸和述『対問筆記』、磯前順一・小倉慈司編『近世朝廷と垂加神道』所収、ぺりかん社、二〇〇五年。

吉見幸和『弁偽書造言総論』、『増補大神宮叢書一八 度会神道大成』後篇所収、吉川弘文館、二〇〇九年。

若林強斎述『中庸師説』第十四冊、書写年不明、無窮会専門図書館平沼文庫所蔵。

若林強斎述『守中翁神道筆記』、神道大系編纂会編刊『神道大系 論説編十三 垂加神道（下）』所収、一九七八年。

若林強斎述『神道夜話』、神道大系編纂会編刊『神道大系 論説編十三 垂加神道（下）』所収、一九七八年。

若林強斎述『日本書紀弁』、神道大系編纂会編刊『神道大系 論説編十三 垂加神道（下）』所収、一九七八年。

若林強斎「垂加靈社招徠祝詞」、神道大系編纂会編刊『神道大系 論説編十三 垂加神道（下）』所収、一九七八年。

若林強斎述『神道大意』、神道大系編纂会編刊『神道大系 論説編十

三 垂加神道（下）』所収、一九七八年。

若林強斎述『別本・神道大意』、神道大系編纂会編刊『神道大系 論説編十三 垂加神道（下）』所収、一九七八年。

若林強斎述『中臣祓師説』、神道大系編纂会編刊『神道大系 論説編十三 垂加神道（下）』所収、一九七八年。

若林強斎述『望楠所聞』、金本正孝編『強斎先生語録』所収、溪水社、二〇〇一年。

若林強斎『家礼訓蒙疏』、吾妻重二編『家礼文献集成 日本篇一』所収、関西大学出版部、二〇一〇年。

若林強斎述『守中潮翁神代卷講義』、松本丘編『神道資料叢刊 十三 垂加神道未公刊資料集 一』皇學館大学神道研究所、二〇一二年。

度会延佳『陽復記』、『日本思想大系三九 近世神道論 前期国学』岩波書店、一九七二年。

二次資料

- 我妻建治『神皇正統記論考』吉川弘文館、一九八一年
- 揚原敏子「近代文学研究資料 二八四 評伝萩野由之」『学苑』三一五号、一九六六年三月。
- 葦津珍彦『新版 国家神道とは何だったのか』神社新報社、二〇〇六年。
- 荒川久寿男「水戸における皇国学の形成——藤田幽谷の場合」『皇学論集——高原先生喜寿記念』所収、皇学館大学出版部、一九六九年。
- 荒野泰典「近世の東アジアと日本」『近世日本と東アジア』所収、東京大学出版会、一九八八年。
- 井畔秋芳「望楠軒の創設に関する研究」『史学雑誌』五二卷九号、一九四一年。
- 「医家原田家書籍解説」『只見町文化財調査報告書 第二一集 医家原田家書籍目録』福島県只見町教育委員会、二〇一六年（久野俊彦担当箇所）。
- 石井紫郎「中世の天皇制に関する覚書」『権力と土地所有』所収、東京大学出版会、一九六六年。
- 石田雄『『正統と異端』はなぜ未完に終わったか』『丸山眞男との対話』所収、みずず書房、二〇〇五年。
- 井関大介『近世日本における経世論的宗教論と「神道」』東京大学大学院人文社会系研究科提出博士論文、二〇一四年。
- 井関大介「増穂残口の「公道」と「神道」」『東京大学宗教学年報』三二号、二〇一五年三月。

- 磯前順一「近代神道学の成立——田中義能論」『近代日本の宗教言説とその系譜——宗教・国家・神道』所収、岩波書店、二〇〇三年。
- 磯前順一「国家神道をめぐる覚書」『近代日本の宗教言説とその系譜——宗教・国家・神道』所収、岩波書店、二〇〇三年。
- 伊藤聡『中世天照大神信仰の研究』法藏館、二〇一一年。
- 伊藤聡『神道とは何か——神と仏の日本史』中公新書、二〇一二年。
- 伊藤聡『「神道」研究史管見』『日本思想史学』四五号、二〇一三年。
- 伊藤正義「中世日本紀の輪郭——太平記における卜部兼員説をめぐって」『文学』四〇卷一〇号、一九七二年一〇月。
- 糸賀茂男・所功・白山芳太郎・勢田道生・梶山孝夫・廣瀬重見・山口道弘『「神皇正統記」をめぐる諸問題 相互討論』『藝林』六五卷一号、二〇一六年四月。
- 稲田正次『明治憲法成立史』下巻、有斐閣、一九八七年。
- 井之上大輔「近代天皇制国家における後期水戸学の受容過程——井上毅を通して」『筑紫女学園大学・短期大学部 人間文化研究所年報』二一号、二〇一〇年八月。
- 井上敏夫編『国語教育史資料 第二卷 教科書史』東京法令出版、一九八一年。
- 井上智勝「神道者」、高埜利彦編『近世の身分的周縁 1 民間に生きる宗教者』所収、吉川弘文館、二〇〇〇年。
- 井上智勝『近世の神社と朝廷権威』吉川弘文館、二〇〇七年。
- 井上智勝「近世の国家権力と宗教」、高埜利彦・井上智勝編『近世の宗教と社会（二） 国家権力と宗教』所収、吉川弘文館、二〇〇八年。

年。

井上寛司『日本の神社と「神道」』校倉書房、二〇〇六年。

井上寛司『「神道」の虚像と実像』講談社現代新書、二〇一一年。

今田洋三『江戸の本屋さん——近世文化史の側面』平凡社ライブラリー、二〇〇九年。

イ・ヨンスク『「国語」という思想——近代日本の言語認識』岩波現代文庫、二〇一二年。

岩佐正「神皇正統記及び新葉集の研究史」『国語と国文学』十二巻四号、一九三五年四月。

岩佐正「解説」『日本古典文学大系八七 神皇正統記 増鏡』所収、岩波書店、一九六五年。

岩佐正「重修神皇正統記考」『国語教育研究』一〇号、一九六五年四月。

岩佐正「解説」『神皇正統記』所収、岩波文庫、一九七五年。

上田万年監修『国学者伝記集成』続、名著刊行会、一九七八年。

上島亨「中世王権の創出とその正統性」『日本中世社会の形成と王権』所収、名古屋大学出版会、二〇一〇年。

植松茂「近世初期の古事記研究」『古事記年報』四号、一九五七年六月。

植村和秀『丸山眞男と平泉澄——昭和期日本の政治主義』柏書房、二〇〇四年。

浮田真弓「明治中後期中学校国語読本教科書に関する一考察」『人文科教育研究』二五号、一九九八年。

牛尾弘孝「崎門における朱子学と神道」『九州中国学会報』三二号、一九九三年。

牛尾弘孝「若林強斎」、『叢書日本の思想家 儒学編十三 浅見綱斎 若林強斎』所収、明德出版社、一九九〇年。

内田周平「若林強斎先生事歴」滋賀県教育会、一九一三年。

内田周平「崎門学者と南朝正統論」平泉澄編『闇斎先生と日本精神』所収、至文堂、一九三二年。

宇野田尚哉「儒者」、横田冬彦編『身分的周縁と近世社会5 知識と学問をになう人々』吉川弘文館、二〇〇七年。

遠藤潤「『神道』から見た近世と近代——社会的文脈におけることばの意味をめぐる」、池上良正・小田淑子・島蘭進・末木文美士・関一敏編『岩波講座宗教 第三巻 宗教史の可能性』所収、岩波書店、二〇〇四年。

大川真「近世王権論と「正名」の転回史」御茶の水書房、二〇一二年。

大久保久雄「数字でみる大橋家博文館——出版点数と館員数」『東海大学紀要 課程資格教育センター』六号、一九九六年。

大場一央「会沢正志斎の『論語』理解と実践」『東洋の思想と宗教』三二号、二〇一五年三月。

大日方純夫「南北朝正閏問題の時代背景」『歴史評論』七四〇号、二〇一一年。

小沢栄一『近世史学思想史研究』吉川弘文館、一九七四年。

大原康男「国学者にみる〈国体〉概念の理解——「政治への関心」

という視点から、國學院大學日本文化研究所創立百周年記念論文集編集委員会編『維新前後に於ける国学の諸問題』所収、國學院大學日本文化研究所、一九八三年。

小笠原春夫『国儒論争の研究——直毘霊を起点として』ぺりかん社、一九八八年。

小川有閑「井上毅の国体教育主義における近代国学の影響」『東京大学学芸学年報』二六号、二〇〇九年三月。

小倉慈司・山口輝臣『天皇の歴史9 天皇と宗教』講談社、二〇一年。

岡野友彦『北畠親房』皇學館大學出版部、一九九五年。

岡野友彦『北畠親房——大日本は神国なり』ミネルヴァ書房、二〇〇九年。

岡本準水「本居宣長書入本寛永版『古事記』の考察——別天神「天之常立神」の項（続）」、太田善麿先生追悼論文集刊行会編『古事記・日本書紀論叢——太田善麿先生追悼論文集』所収、続群書類従完成会、一九九九年。

岡本準水「本居宣長書入本寛永版『古事記』の考察——別天神「天之常立神」の項（続）」、太田善麿先生追悼論文集刊行会編『古事記・日本書紀論叢——太田善麿先生追悼論文集』所収、続群書類従完成会、一九九九年。

海後宗臣編『井上毅の教育政策』東京大学出版会、一九六八年。
甲斐雄一郎「小中学校における国語科成立時期のずれに関する一考察」『人文科教育研究』三二二号、二〇〇五年。

梶山孝夫『水戸の国学——吉田活堂を中心として』水戸史学会、一九九七年。

梶山孝夫『水戸派国学の研究』神道史学会、一九九九年。

梶山孝夫「水戸学と国学の関係——尊攘論を中心として」『日本学研究』三三三号、二〇〇〇年六月。

梶山孝夫「近世思想史と『神皇正統記』——水戸学を中心に」『藝林』六五卷一号、二〇一六年五月。

桂島宣弘『華夷』思想の解体と国学的『自己』像の生成『思想史の十九世紀——「他者」としての徳川日本』所収、ぺりかん社、一九九九年。

上西亘・武田幸也・藤田大誠「皇典研究所・國學院大學の刊行物一覧」『國學院大學伝統文化リサーチセンター研究紀要』四号、二〇一二年三月。

苅部直「回想と忘却——丸山眞男の『神皇正統記』論」『秩序の夢——政治思想論集』所収、岩波書店、二〇一三年。

菊池謙二郎『水戸学論叢』誠文堂新光社、一九四三年。

菊野雅之「史料紹介」今泉定介「中等教育に於ける国文科の程度」『教育時論』三三四号 明治二七年七月『国語論叢』一号、二〇一三年九月。

鍛代敏雄『神国論の系譜』法藏館、二〇〇六年。

木野主計「井上毅年譜」『井上毅研究』、続群書類従完成会、一九九五年。

教育史編纂会編『明治以降教育制度発達史』第一卷、竜吟社、一九

三八年。

桐原健真「東方君子国の落日——『新論』的世界観とその終焉」『明治維新史研究』三号、二〇〇六年十二月。

桐原健真「会沢正志斎『新論』、荻部直編『岩波講座日本の思想』第三卷 内と外——対外観と自己像の形成」所収、岩波書店、二〇一四年。

桐原健真「弘道館の祭神——会沢正志斎の神道思想」、佐々木寛司編

『近代日本の地域史的展開』所収、岩田書院、二〇一四年。

宮内庁『明治天皇紀』第一卷、吉川弘文館、一九六八年

久保田収『近世史学史論考』皇学館大学出版部、一九六八年。

黒住真『近世日本社会と儒教』ぺりかん社、二〇〇三年

黒田俊雄『日本中世の国家と宗教』岩波書店、一九七五年。

『黒田俊雄著作集 第四卷 神国思想と専修念仏』法藏館、一九九五年。

河内祥輔『中世の天皇観』山川出版社、二〇〇三年。

河野省三『国学の研究』大岡山書店、一九三四年。

國學院大學校史資料課編『國學院大學百年史』上巻、國學院大學、一九九四年。

小島吉雄「日本精神と神皇正統記」『古典研究』二巻九号、一九三七年九月。

小助川元太『『鑑囊鈔』の『神皇正統記』引用——政道論を中心に』『伝承文学研究』五〇号、二〇〇〇年。

小林健三「若林強斎先生の神道観——特に中臣祓師説を中心として」

『神道学雑誌』二〇号、一九三六年。

小林健三「望楠軒神道の研究」『垂加神道』理想社、一九四二年。

小林准士「近世神道説における教化の言説——増穂残口の神道説」『季刊日本思想史』四七号、一九九六年三月。

駒井義明「亡父（佐伯有義）の思ひ出」『神道史研究』六巻一号、一九五八年一月。

小松徳年「青山延干著『皇朝史略』の刊行をめぐる二、三の問題——延干宛藤田幽谷書簡を中心にして」『茨城県立歴史館報』一五号、一九八八年。

子安宣邦『本居宣長』岩波新書、一九九二年。

子安宣邦『「宣長問題」とは何か』ちくま文庫、二〇〇〇年。

子安宣邦『方法としての江戸——日本思想史と批判的視座』ぺりかん社、二〇〇〇年。

子安宣邦『国家と祭祀——国家神道の現在』青土社、二〇〇四年。

近藤啓吾『若林強斎の研究』神道史学会、一九七九年。

近藤啓吾『山崎闇斎の研究』神道史学会、一九八六年。

近藤啓吾『続々山崎闇斎の研究』神道史学会、一九九五年。

近藤啓吾『続若林強斎の研究』臨川書店、一九九七年。

近藤啓吾『紹宇存稿』国書刊行会、二〇〇〇年。

齊藤智朗「明治二十年代初頭における国学の諸相——池辺義象の著作を中心に」『國學院雑誌』一〇四巻一号、二〇〇三年十一月。

齊藤智朗『井上毅と宗教』弘文堂、二〇〇六年。

齊藤智朗「明治国学の継承をめぐる——池辺義象と明治国学史」

『國學院雜誌』一〇七卷一一号、二〇〇六年十一月。

齊藤智朗「井上毅と明治国学」『國學院大學研究開発推進機構紀要』一号、二〇〇九年三月。

斎藤英喜「近世神話としての『古事記伝』」『佛教大学 歴史学部論集』九四号、二〇一〇年。

斎藤英喜「中世日本紀から『古事記伝』へ」、山下久夫・斎藤英喜編『越境する古事記伝』所収、森話社、二〇一二年。

斎藤英喜『古事記はいかに読まれてきたか』吉川弘文館、二〇一二年。

坂本辰之助『飯田武郷伝』明文社、一九四四年。

阪本是丸『国家神道形成過程の研究』岩波書店、一九九四年。

阪本是丸『近世近代神道論考』弘文堂、二〇〇七年。

桜井好朗「中世国家神話の形成——『神皇正統記』の表現構造のなかで」『中世日本文化の形成——神話と歴史叙述』所収、東京大学出版会、一九八一年。

佐々木聖使「国家神道における「神」観の成立」『明治聖徳記念学会紀要』復刊三五号、二〇〇二年六月。

佐佐木杜太郎「山鹿素行の日本学と神道の基盤——中朝事実構成の参考文献を探る」『神道学』六二号、一九六九年八月。

佐藤弘夫「神国思想考」『日本史研究』三九〇号、一九九五年二月。

澤井啓一『山崎闇斎——天人唯一の妙、神明不思議の道』ミネルヴァ書房、二〇一四年。

澤博勝「日本における宗教的対立と共存——近世を中心に」『近世宗

教社会論』所収、吉川弘文館、二〇〇八年。

島蘭進「総説 一九日本の宗教構造の変容」、小森陽一他編『岩波講座 近代日本の文化史2 コスモロジーの近世』岩波書店、二〇〇一年。

島蘭進「国家神道と近代日本の宗教構造」『宗教研究』七五巻二輯、二〇〇一年九月。

島蘭進「神道と国家神道・試論——成立への問いと歴史的展望」『明治聖徳記念学会紀要』復刊四三号、二〇〇六年十一月。

島蘭進『国家神道と日本人』岩波新書、二〇一〇年。

島田虔次「宋学の展開」、荒松雄他編『岩波講座 世界歴史9』所収、岩波書店、一九七〇年。

島田虔次『新訂中国古典選 大学・中庸』朝日新聞社、一九六七年。

清水則夫「浅見綱斎の神道観と道について」『日本思想史学』三十九号、二〇〇七年。

清水則夫「崎門における歴史と政治」、金時徳・濱野靖一郎編『アジア遊学 一九八 海を渡る史書——東アジアの「通鑑」』所収、勉誠出版、二〇一六年。

清水教好「幕藩制後期政治思想の一特質——後期水戸学への道程」『日本思想史研究会会報』七号、一九八八年一〇月。

清水教好「対外危機と松平定信の神国思想——その生成と展開についての覚書」『立命館大学人文科学研究紀要』五九号、一九九三年一〇月。

清水教好「松平定信の神国思想——対外危機意識の特質とその思想

史的考察』『日本思想史研究会会報 清水教好遺稿集』所収、二〇〇八年二月。

清水正之『日本の思想』放送大学教育振興会、二〇〇八年。

下川玲子『北畠親房の儒学』ぺりかん社、二〇〇一年。

下川玲子「日本朱子学と神道」『朱子学的普遍と東アジア——日本・朝鮮・現代』所収、ぺりかん社、二〇一一年。

下中彌三郎編『神道大辞典（縮刷版）』平凡社、一九八六年。

蔣建偉「会沢正志斎の祖宗・名賢祭祀論——民心統合との関係性を中心に」『東洋の思想と宗教』二二号、二〇一四年三月。

白山芳太郎『北畠親房の研究』ぺりかん社、一九九八年。

白山芳太郎『神道説の発生と伊勢神道』国書刊行会、二〇一〇年。

白山芳太郎『神皇正統記』と中世伊勢の神学、皇學館大学編『神宮と日本文化——皇學館大学創立百三十周年・再興五十周年記念』所収、皇學館大学、二〇一二年。

白山芳太郎「神皇正統記と愚管抄」『藝林』六五卷一号、二〇一六年四月。

『神道人名辞典』神社新報社、一九八六年。

進藤英幸『叢書・日本の思想家十四 三宅観瀾・新井白石』明德出版社、一九八四年。

鈴木暎一「水戸藩の国学と廃仏論」『水戸藩学問・教育史の研究』所収、吉川弘文館、一九八七年。

勢田道生『北畠准后伝』と神戸能房編『伊勢記』『語文』九七号、二〇一一年一二月。

勢田道生「近世における北畠親房像の展開——四つの親房伝をめぐって」『皇學館大学神道研究所紀要』三〇号、二〇一四年三月。

勢田道生「南朝史受容と神皇正統記」『藝林』六五卷一号、二〇一六年四月。

瀬谷義彦『水戸学の史的考察』中文館書店、一九四〇年。

平重道『近世日本思想史研究』吉川弘文館、一九六九年。

平雅行「神仏と中世文化」、歴史学研究会・日本史研究会編『日本史講座4 中世社会の構造』所収、東京大学出版会、二〇〇四年。

高木昭作『將軍権力と天皇——秀吉・家康の神国観』青木書店、二〇〇三年。

高島元洋『山崎闇斎——日本朱子学と垂加神道』ぺりかん社、一九九二年。

高須芳次郎『水戸学派の尊皇及び経綸』雄山閣、一九三六年。

高須芳次郎「解題」、『水戸学大系第七卷 栗山潜鋒三宅観瀾集』所収、水戸学大系刊行会、一九四一年。

高須芳次郎『水戸学講話』今日の問題社、一九四三年。

高田信敬「慶応版『神皇正統記』について——闕画の裾野」『鶴見日本文学会報』七三号、二〇一三年一〇月。

高埜利彦『近世日本の国家権力と宗教』東京大学出版会、一九八九一年。

高埜利彦「はじめに」、高埜利彦・井上智勝編『近世の宗教と社会(二) 国家権力と宗教』所収、吉川弘文館、二〇〇八年。

高橋昊「今泉定助先生正伝研究——その国体論と神道思想史上の地位」、日本大学今泉研究所編刊『今泉定助先生研究全集』第一巻所収、一九六九年。

高山大毅「遅れてきた古学者——会沢正志斎の国制論」「近世日本の「礼楽」と「修辞」——荻生徂徠以後の「接人」の制度構想」所収、東京大学出版会、二〇一六年。

武田幸也「祭神論争における『伊勢』と『出雲』」「國學院大學研究開発推進機構紀要」七号、二〇一五年三月。

武田幸也「今泉定助の思想と皇道発揚運動」、國學院大學研究開発推進センター編・阪本是丸責任編集『昭和前期の神道と社会』所収、弘文堂、二〇一六年。

谷省吾監修・吉崎久編『岡田磐齋・磐鎮父子蔵書目録』皇學。館大學神道研究所、一九八五年。

谷省吾「岡田正利の自叙小伝『磐齋之記』」「垂加神道の成立と展開」所収、国書刊行会、二〇〇一年。

谷省吾『垂加神道の成立と展開』国書刊行会、二〇〇一年。

玉懸博之『日本中世思想史研究』ぺりかん社、一九九八年。

圭室文雄『江戸幕府の宗教統制』評論社、一九七一年。

田坂文穂『明治時代の国語科教育』東洋館出版社、一九六九年。

田坂文穂『近代後期の国語科教育』東洋館出版社、一九七二年。

田尻佐編『贈位諸賢伝（増補版）』上巻、近藤出版社、一九七五年。

田尻祐一郎「闇齋学派——若林強齋を中心に」、源了圓編『江戸の儒学——『大学』受容の歴史』思文閣出版、一九八八年。

田尻祐一郎「近世日本の『神国』論」、片野達郎編『正統と異端——天皇・天・神』所収、角川書店、一九九一年。

田尻祐一郎「通俗道徳と『神国』『日本』」、玉懸博之他編『国家と宗教』所収、思文閣出版、一九九二年。

田尻祐一郎「儒学の日本化——闇齋学派の論争から」、頼祺一編『日本の近世十三 儒学・国学・洋学』中央公論社、一九九三年。

田尻祐一郎「儒学の日本化をめぐる」『神道宗教』一五四号、一九九四年三月。

田尻祐一郎「二つの『理』——闇齋学派の普遍感覚」「思想」七六六号、一九八八年四月。

田尻祐一郎『山崎闇齋の世界』ぺりかん社、二〇〇五年。

田尻祐一郎『江戸の思想史——人物・方法・連環』中公新書、二〇一一年。

田中俊亮「前期水戸学における「実」の戦略」——安積澹泊の諸言表をめぐる『日本思想史研究会会報』一九号、二〇一二年十二月。

千葉真也「本居宣長手沢本旧事紀または大山為起校訂本旧事紀について」『朱』三六号、一九九三年二月。

千葉真也「古事記校訂における為起と宣長——宣長手沢本古事記上巻」『相愛大学研究論集』九号、一九九三年三月。

千葉真也「為起から宣長へ」『中西智海先生還暦記念論文集 仏教と人間』所収、永田文昌堂、一九九四年。

千葉真也「古事記」、本居宣長記念館編『本居宣長事典』所収、東京堂出版、二〇〇一年。

辻本雅史「寛政異学の禁をめぐる思想と教育——正学派朱子学と異学の禁」『近世教育思想史の研究——日本における「公教育」思想の源流』所収、思文閣出版、一九九〇年。

津田左右吉『日本の神道』、『津田左右吉全集』第九卷所収、岩波書店、一九六四年。

津田左右吉「祭政一致の思想について」『津田左右吉全集』第九卷所収、岩波書店、一九六四年。

土田健次郎「鬼神と『かみ』——儒家神道初探」『斯文』一〇四号、一九九五年。

土田健次郎「朱子学の正統論・道統論と日本への展開」、吾妻重二・黄俊傑編『国際シンポジウム 東アジア世界と儒教』所収、東方書店、二〇〇五年。

テイリツヒ、パウル（古屋安雄・栗林輝夫訳）『社会主義的決断』、『テイリツヒ著作集』第一卷所収、白水社、一九七八年。

テーウン、マーク（彌永信美訳）「神祇、神道、そして神道——〈神道〉の概念史を探索」『文学』九卷二号、二〇〇八年三月。

出村勝明「持授抄の成立について」『皇學館論叢』九卷五号、一九七六年一〇月。

寺島俊穂「エリック・フエーゲリン——実存の精神的次元」『政治哲学の復権——アレントからロールズまで』所収、ミネルヴァ書房、一九九八年。

ドゥルーズ、ジル（宇野邦一訳）『フリーコ』河出文庫、二〇〇七年。
鳥巢通明「山崎闇斎に於ける吉野正統の自覚」『國學院雑誌』五〇卷

七号、一九四四年八・九月。

鳥巢通明「大日本史と崎門史学の関係」、日本学協会編『大日本史の研究』所収、立花書房、一九五七年

鳥巢通明「北畠親房と崎門学派」、平泉澄監修『増補 北畠親房公の研究』所収、皇學館大學出版部、一九七五年。

トレルチ、エルンスト（近藤勝彦訳）『トレルチ著作集4 歴史主義とその諸問題（上）』ヨルダン社、一九八〇年。

仲田昭一「平泉澄博士と神皇正統記——水戸六地藏寺調査と正統記研究を中心に」『藝林』五二卷二号、二〇〇三年一〇月。

中村哲也「国民教育の成立と言語ナショナリズム——井上毅と上田万年」『大人と子供の関係史』三号、一九九八年。

中山広司「北畠親房と山鹿素行」『皇學館史学』三号、一九八九年二月。

名越時正『水戸学の研究』神道史学会、一九七五年。

名越時正「北畠親房公と水戸学の道統」、平泉澄監修『増補 北畠親房公の研究』所収、皇學館大學出版部、一九七五年。

名越時正『水戸光圀とその余光』水戸史学会、一九八五年。

名越時正「水戸学の準拠——神皇正統記に求められしもの」『水戸史学』七四号、二〇一一年六月。

並木浩一「ヨブ記における相互テクスト性」『ヨブ記論集成』所収、教文館出版部、二〇〇三年。

西内雅『渋川春海の研究』至文堂、一九四〇年。

西内雅『谷秦山の神道』高原社、一九四三年。

西岡和彦「大山為起の日本書紀研究と藤森神社——近世中期神道家の古典研究」『神道宗教』一五三号、一九九三年。

西岡和彦「垂加神道善悪考序説——山崎闇斎と大山為起」『季刊日本思想史』四七号、一九九六年四月。

西岡和彦「江戸垂加神道家の天皇観——跡部良頭と伴部安崇の『旧事本紀玄義』研究を通して」『日本学研究』三三号、二〇〇〇年六月。

西岡和彦「神籬磐境考——垂加神道の祭政一致観」、阪本是丸編『国家神道再考——祭政一致国家の形成と展開』所収、弘文堂、二〇〇六年。

西田長男「大山為起」『朱』二九号、一九八五年六月。

西田長男「大山為起の学問——その校訂本『先代旧事本紀』を通じて」『朱』二四号、一九八〇年六月。

新田均「書評 島蘭進『国家神道と日本人』」『宗教研究』八五卷二号、二〇一一年九月。

新田均「最近の動向を踏まえた『国家神道』研究の再整理」『宗教法』三二号、二〇一三年。

日本大学今泉研究所編「年譜・著作・日録抄」『今泉定助先生研究全集』第一卷所収、一九六九年。

野口武彦『徳川光圀』朝日新聞社、一九七六年。

野口武彦『江戸の歴史家——歴史という名の毒』筑摩書房、一九七九年。

野口武彦「江戸の歴史意識と南北朝」『江戸人の歴史意識』所収、朝日新聞社、一九八七年。

野口雅弘『闘争と文化——マックス・ウェーバーの文化社会学と政治理論』みず書房、二〇〇六年。

羽賀祥二「史蹟の保存と顕彰——南朝忠臣顕彰運動をめぐる」『国文学解釈と鑑賞』七〇巻一〇号、二〇〇五年一〇月。

萩原竜夫「北畠親房に於ける神道・密教の相関」『東京学芸大学研究報告』六号、一九五五年。

朴薫「一九世紀前半日本における『議論政治』の形成とその意味」、明治維新史学会編『世界史のなかの明治維新』所収、有志舎、二〇一〇年。

朴鴻圭『山崎闇斎の政治理念』東京大学出版会、二〇〇二年。

橋本辰彦「神皇正統記に表はれたる親房の帝範臣軌論」『歴史教育』二巻一〇号、一九二八年。

原田文穂「水戸学派の他学派批判(下)——水戸学の研究のうち」『史学雑誌』五四編七号、一九四三年七月。

原田美枝子「金子元臣」、昭和女子大学近代文学研究室『近代文学研究叢書』第五三卷所収、昭和女子大学近代文化研究所、一九八二年。

浜本純逸『国語及漢文』(いわゆる『国語科』)の成立——中等学校国語教育史(四)『国語教育思想研究』一〇号、二〇一五年。

林淳「日本宗教史における世俗化過程」、脇本平也・柳川啓一編『現代宗教学(四) 権威の構築と破壊』所収、東京大学出版会、一九九二年。

東川恵一「北畠親房と垂加神道の関係及びその継承」『神社本庁教学研究』所収、二〇〇二年。

東より子『宣長神学の構造——仮構された神代』ぺりかん社、一九九九年。

樋口浩造「近世神道と教説の時代——垂加神道を中心に」『「江戸」の批判的系譜学——ナシヨナリズムの思想史』所収、ぺりかん社、二〇〇九年。

尾藤正英『日本封建思想史研究——幕藩体制の原理と朱子学的思惟』青木書店、一九六一年。

尾藤正英「大日本史の思想」、水戸市史編纂委員会編『水戸市史』中巻（一）所収、水戸市、一九六八年。

尾藤正英「水戸学の特質」『日本の国家主義——「国体」思想の形成』所収、岩波書店、二〇一四年。

平泉洸「垂加神道と『神皇正統記』との関係」『神道史研究』三〇巻四号、一九八二年一〇月。

「平田家系図」、国立歴史民俗博物館編刊『明治維新と平田国学』、二〇〇四年。

平田利春『神皇正統記の基礎的研究』雄山閣出版、一九七九年。
深作安文「国学と水戸学」『国語と国文学』一六巻一〇号、一九三九年。

福井久蔵「谷川淡斎翁の書入萬葉集等につきて」、谷川士清先生事蹟表彰会編『谷川士清先生傳』所収、大日本図書、一九一二年。

福島タマ「落合直文」、昭和女子大学近代文学研究室『近代文学研究叢書』第七巻所収、昭和女子大学光葉会、一九五七年。

福島タマ・芳川雅子・坪君江「関根正直」、昭和女子大学近代文学研

究室『近代文学研究叢書』第三三巻所収、昭和女子大学光葉会、一九七〇年。

フーコー、ミシェル（渡辺守章訳）『性の歴史Ⅰ 知への意志』新潮社、一九八六年。

フーコー、ミシェル（桑田禮彰・福井憲彦・山本哲士訳）「セックスと権力」、桑田・福井・山本編『新装版 ミシェル・フーコー 1926—1984』所収、新評論、一九九七年。

フーコー、ミシェル（北山晴一訳）「真理と権力」、桑田禮彰・福井憲彦・山本哲士編『新装版 ミシェル・フーコー 1926—1984』所収、新評論、一九九七年。

フーコー、ミシェル（慎改康之訳）『知の考古学』河出書房、二〇一二年。

藤井貞文「北畠親房論の変遷」『大八洲』二五巻三号、一九三六年三月。

藤田覚「朝幕関係の転換——大政委任論・王臣論の成立」『近世政治史と天皇』所収、吉川弘文館、一九九九年。

藤田大誠『近代国学の研究』弘文堂、二〇〇七年。
藤田大誠「近代国学における「神道」と「道徳」に関する覚書——

皇典講究所・國學院の展開を中心に」『國學院大學校史・学術資産研究』二号、二〇一〇年三月。

藤田大誠「国家神道」概念の有効性に関する一考察——島蘭進著『国家神道と日本人』の書評を通して」『明治聖徳記念学会紀要』復刊四八号、二〇一一年一月。

藤田大誠「近代国学と人文諸学の形成」、井田太郎・藤巻和宏編『近代学問の起源と編成』所収、勉誠出版、二〇一四年。

細井保「エリック・フエーゲリンの政治神学」、同編『20世紀の思想経験』所収、法政大学現代法研究所、二〇一三年。

堀一郎「日本文化の潜在意志としての神道——ベラ教授とエリオットの所見をめぐって」『聖と俗の葛藤』所収、平凡社、一九七五年。
マイネッケ、フリードリッヒ（菊盛英夫・麻生建訳）『歴史主義の成立』上巻、筑摩書房、一九六八年。

前田勉『近世神道と国学』ぺりかん社、二〇〇二年。

前田勉『兵学と朱子学・蘭学・国学——近世日本思想史の構図』平凡社、二〇〇六年。

股座真実子「十七世紀後半〜十八世紀前半における〈知〉の断面——魚崎村の闇齋学派・山本復斎を通して」『書物・出版と社会変容』十六号、二〇一四年。

松川雅信「朱子」と「日用」のあいだ——綱齋・強斎による『朱子家礼』受容』『日本思想史研究会会報』二十九号、二〇一二年。

松本三之介「近世における歴史叙述とその思想」『近世日本の思想像——歴史的考察』所収、研文出版、一九八四年。

松本純郎「水戸藩に於ける吉野正統の自覚に就いて」『水戸学の源流「復刻版」』所収、国書刊行会、一九九七年。

松本丘『尚仁親王と栗山潜鋒』神道史学会、二〇〇四年。

松本丘「近世に於ける祭政一致思想の展開——垂加神道より水戸学へ」、阪本是丸編『国家神道再考——祭政一致国家の形成と展開』所

収、弘文堂、二〇〇六年。

松本丘「前期水戸学に於ける南北朝正閏論」『水戸史学』六九号、二〇〇八年十一月。

松本丘『垂加神道の人々と日本書紀』弘文堂、二〇〇八年。

丸山眞男『日本政治思想史研究』東京大学出版会、一九五二年。

丸山眞男「闇齋学と闇齋学派」『丸山眞男集』第十一巻、岩波書店、一九九六年。

『丸山眞男講義録「第五冊」日本政治思想史 一九六五』東京大学出版会、一九九九年。

水戸市史編纂委員会編『水戸市史』中巻（二）、水戸市、一九六八年。

溝口駒造「水戸学に於ける三宅観瀾の位置と其の影響」『転換期の神道』所収、畝傍書房、一九四一年。

宮地正人「幕末平田国学と政治情報」『幕末維新期の社会的政治史研究』所収、岩波書店、一九九九年。

宮田光雄『日本の政治宗教——天皇制とヤスクニ』朝日選書、一九八一年。

南信一「賀茂真淵の古典会説——『谷垣守日記』並に『古事記聞書』を資料として」『国語と国文学』二三巻九号、一九四六年九月。

村岡典嗣「神皇正統記白山本の学問的意義について」『続 日本思想史研究』所収、岩波書店、一九九四年。

村上重良『国家神道』岩波新書、一九七〇年。

森和也「伊勢貞丈における道義としての『神道』の解体」『早稲田大学大学院文学研究科紀要 第一分冊』四三号、一九九七年。

森瑞枝「神社制度」「律令祭祀」、伊藤聡・遠藤潤・松尾恒一・森瑞枝『日本史小百科 神道』所収、東京堂出版、二〇〇二年。

諸橋轍次「支那の神器及び正統論」『経史八論』所収、関書院、一九三三年。

八木雄一郎「小中村義象の国語教育論——明治20年代における「国語観の時代的拡大」の中で」『人文科教育研究』三三号、二〇〇六年八月。

柳父圀近『エートスとクラトス——政治思想史における宗教の問題』創文社、一九九二年。

柳父圀近『政治と宗教——ウェーバー研究者の視座から』創文社、二〇一〇年。

柳父圀近『日本のプロテスタンティズムの政治思想——無教会における国家と宗教』新教出版社、二〇一六年。

八代国治「神道家と南朝正統論」『國學院雜誌』一七卷四号、一九一一年四月。

安川実「吉見幸和に於ける歴史的神学の展開」『国民精神文化』五卷一二号、一九三九年一二月。

安川実「跡部良顕の回心に就いて」『国民精神文化』七卷七号、一九四一年七月。

安川実「古学神道成立の由来」『神道学』三二号、一九六一年一二月。

安川実「吉見幸和の神学」『神道学』八四号、一九七五年二月。

安川実「近世合理主義とその神代卷批判」『神道学』九六号、一九七八年二月。

安丸良夫『神々の明治維新——神仏分離と廃仏毀釈』岩波新書、一九七九年

安丸良夫「現代日本における『宗教』と『暴力』」『文明化の経験——近代転換期の日本』所収、岩波書店、二〇〇七年。

安丸良夫『近代天皇像の形成』岩波現代文庫、二〇〇七年。

山口輝臣「宗教と向き合つて——十九・二十世紀」、小倉慈司・山口輝臣『天皇の歴史第九卷 天皇と宗教』講談社、二〇一一年。

山口啓二『鎖国と開国』岩波書店、一九九三年。

山作良之「神皇正統記の奥意」『神道宗教』一八九号、二〇〇三年一月。

山下久夫「近世神話」からみた『古事記伝』注釈の方法——問題提起的に、鈴木健一編『江戸の「知」——近世注釈の世界』所収、森話社、二〇一〇年。

山下久夫・斎藤英喜編『越境する古事記伝』森話社、二〇一二年。

山田孝雄『神皇正統記述義』民友社、一九三二年。

山本信哉「正親町流神道と其の南朝正統論」『國學院雜誌』一七卷四号、一九一一年四月。

山本ひろ子『中世神話』岩波新書、一九九八年。

吉崎久「岡田正利略年譜」『岡田磐斎・盤鎮父子蔵書目録』所収、皇學館大学神道研究所、一九八五年。

吉崎久編『山内文庫 谷秦山・垣守・眞潮関係書目録』皇學館大学神道研究所、二〇〇八年。

吉田俊純「水戸学の神道導入と国学・徂徠学との関係」『寛政期水戸

学の研究——翠軒から幽谷へ』所収、吉川弘文館、二〇一一年。

吉田俊純「尊王攘夷思想の成立——『弘道館記述義』の成立とその思想的環境」『水戸学の研究——明治維新史の再検討』所収、明石書店、二〇一六年。

米原謙『国体論はなぜ生まれたか——明治国家の知の地形図』シネルヴァ書房、二〇一五年。

四方一瀾『中学校教則大綱』の基礎的研究』梓出版社、二〇〇四年。
若尾政希『太平記読み』の時代——近世政治思想史の構想』平凡社、一九九九年。

渡邊卓『『日本書紀』受容史研究——国学における方法』笠間書院、二〇一二年。

渡邊卓「大山為起『味酒講記』の成立過程とその註釈法」『朱』五七号、二〇一四年二月。

渡辺浩『東アジアの王権と思想』東京大学出版会、一九九七年。

渡辺浩『『教』と陰謀——『国体』の一起源」、渡辺浩・朴忠錫編『韓国・日本・「西洋」——その交錯と思想変容』所収、慶應義塾大学出版会、二〇〇五年。

渡辺浩『近世日本社会と宋学（増補新装版）』東京大学出版会、二〇一〇年。

和田光俊・林淳「洪川春海年譜」『神道宗教』一八四号、二〇〇二年。

Breen, John, and Teeuwen, Mark eds. *A New History of Shinto*.
Chichester: Wiley-Blackwell, 2010.

Voegelin, Erich, *Die politischen Religionen*, Munchen: Wilhelm

Fink Verlag, 2007.

Wachutka, Michael, "A Living Past as the Nation's Personality":
Jinnō shōtōki, Early Shōwa Nationalism, and Das Dritte Reich,"
Japan Review 24 (2012): 130-131.

Wachutka, Michael, *Kokugaku in Meiji-Period Japan: The
Modern Transformation of 'National Learning' and the Formation
of Scholarly Societies*, Global Oriental, Leiden, Boston, 2013. p.
200.

論文の内容の要旨

論文題目 日本神学の形成——近世日本における『神皇正統記』の受容史
氏 名 齋 藤 公 太

近代日本の「国家イデオロギー」、いわば「正統 (orthodoxy)」とはいかなるものだったのか。近代を生きた人々の言葉から浮かび上がってくるのは、それが存在しつつ不在であるという奇妙な性格のものだった、ということである。このような「正統」の成立背景の一端を、前近代にまで遡って明らかにすることが本研究の大きな目的である。

近代日本の「正統」は、時に「国家神道」という一つの宗教として説明される。現在の国家神道に関する研究は、いわゆる「広義の国家神道」論が「狭義の国家神道」論の批判にさらされ、存立が難しくなっているという状況にある。しかしそこでは「広義の国家神道」論が有していた「イデオロギー」への問いが主題化されないという問題がある。そこで本研究では、「国家神道」の「イデオロギー」の領域とされてきたものを「日本神学」という概念によって取り出し、その歴史的形成過程と「神道」との関係を考察するという方法をとる。「日本神学」とは日本国家や日本人の「本来性」について語り、その回復を主張する言説を意味する。その本来性の中核は皇統の無窮性にあるとされる。日本神学を「言説」としてとらえることで、その形成過程を明確にたどることができ、またイデオロギー論とは異なり、多様で複雑な文脈に即して対象を理解することが可能となる。

しかし日本神学に該当する事例は膨大な数にのぼる。そこで本研究では対象を絞りこむため、『神皇正統記』（以下『正統記』と略す）の受容史という問題を取り上げる。南朝方の公卿・北畠親房が延元 4（1339）年に執筆した『正統記』は（興国 4〈1343〉年改稿）、日本神学を明確に言説化したテキストであり、近代に至るまで日本神学の典拠として扱われてきた。『正統記』

の受容史はこれまで後世の人々による「精神」の継承という視点に規定されてきたが、本研究は各解釈の間にある断絶に着目するという立場をとる。

第 1 章ではまず予備的考察として『神皇正統記』を取り上げ、その言説構造について分析を行う。これまでの研究で中世神話や中世神道、とりわけ神国思想の登場として語られてきたことは、日本の本来性に関する言説の出現としてとらえ直すことができる。特に南北朝時代の皇統の分立という状況が本来性の明確な言説化をうながし、『正統記』の出現に至ったのである。

本章では『正統記』の言説構造、とりわけ様々な面に見られる両義性に着目する。かかる両義性が『正統記』に関する多様な解釈を可能にしているからである。『正統記』の日本神学と応永史観が組み合わさることで『正統記』独特の「正統」論が生まれる。それは君徳を有する天皇の血統が「正統」になるという言説であり、それにより南朝の正統性を立証するという目的があったと推測される。しかしそれは北朝が「正統」となる可能性を排除できず、『正統記』の言説構造は不安定さをはらんでいたのである。

第 2 章では近世前中期における『正統記』の受容史を取り上げた。近世日本は様々な宗教が競合しつつ多元的に共存する社会であったが、そこで『正統記』は主として史書と神書という二つの側面から受容された。具体的な受容の例としてはまず林羅山を取り上げ、羅山によって摂取された日本神学が儒家神道の基本的枠組みとなったことを明らかにする。また、山鹿素行が『正統記』の日本神学だけでなく、「正統」論も受容していた可能性を示す。素行はそれを近世の二元的な王権のあり方を説明するために用いたのである。新井白石の『読史余論』で『正統記』が度々引用されていることはよく知られているが、白石は『正統記』の史書側面しか受容していない。それは白石の神典解釈の方法論によるものだが、一方で白石は日本神学も共有しており、二元的王権を肯定する言辞も残している。皇室が君徳を失った結果事実上の易姓革命が起こり、武家政権が成立したという解釈が素行や白石には共通して見られる。近世前中期までは『正統記』もそのような枠組みのもとで受容されえたのだった。

第 3 章では閩齋学派の南朝正統論の問題を取り上げる。山崎闇斎は、日本でも「神道」という形で朱子学に相当する「道」が実践されてきた結果、皇統が守られたと考え、また天皇自身も「道」の担い手だったと見なした。そうした立場からは武家政権の成立をある種の「革命」と見なす解釈は容認できず、南北朝時代の問題は一つのアポリアとなった。『倭鑑』目録からは、闇斎がそのアポリアを神器正統論によって克服しようとしていたことがわかる。闇斎直門の浅見綱斎や佐藤直方らは神器正統論を排除したが、第三世代の門弟の間ではむしろ神器正統論が興隆していく。本章ではそこから歴史主義の興隆という知の布置の変動を明るみに出す。

第 4 章では閩齋学派における神道の問題をさらに掘り下げるため、綱斎の弟子の若林強斎を取り上げる。強斎は『正統記』でいう「神皇正統」を学問の準拠としているため、『正統記』受容史の一環として扱ってもよいだろう。これまでの研究では、強斎は朱子学から神道へと回帰した人物として位置付けられてきた。しかし実際に強斎の思想をたどってみると、むしろ神道を「日本固有の道」としての「神道」と同一視することにより、朱子学の実践を正当化しようとしていたことがわかる。それは神道に傾倒していったと見なされてきた享保 9 年以降でも変わらない。

しかし強齋は次第に日本中心主義に陥っていき、また晩年には自身の「罪」をめぐる問題に直面することになる。

第 5 章では前期水戸学における神器論争について論じる。前期水戸学の三大特筆の一つである南朝正統論は、神器正統論によって根拠づけられていた。それを決定したのは徳川光圀だったが、神器正統論の解釈をめぐる彰考館の史官の間では議論が戦わされていた。神器正統論の推進派は闇齋学派の栗山潜鋒であり、潜鋒は皇室復興を目指すという自身の政治実践との連関で、神器正統論により天皇の正統性を確かなものにしようとしていたのである。潜鋒を批判した三宅観瀾も闇齋学派であり、従来は儒学派といわれてきたが、実際には考証主義的な視点から『正統記』や垂加派の教説を批判し、それを超える神道論を提示していたことが明らかになる。

第 6 章ではこれまでの議論をまとめ、その後の考察につなげるため、17 世紀末から 18 世紀初頭を境に起きた知の布置の変動について説明する。それは歴史主義の興隆とでもいうべき変化であった。歴史主義という知は、真理の歴史化、方法としての考証主義、「政治的なもの」の発見、日本の本来性の浮上といった要素から成り立っている。この変化を示す具体例として、まず垂加派における『古事記』研究を取り上げ、「付会」的な研究から考証主義的方法へと移行していく過程を示す。次に、徂徠学派による神道批判以降の「神道」概念の再構築も取り上げる。徂徠学派の批判により旧来の神道教説は存立が難しくなり、新たな「神道」を求める潮流はやがて宣長に至るが、同時にその潮流は神書としての『正統記』の命脈を断つことにもなるのである。

第 7 章では後期水戸学における国学批判と『正統記』受容との関係について論じる。後期水戸学の出発点たる幽谷は、幕藩制国家の危機に対処すべく「国体」を重視し、『正統記』をその典拠として再解釈する一方、国学を批判した。「国体」の書としての『正統記』の重視と国学批判という組み合わせは、会沢正志斎や藤田東湖といった幽谷の弟子たちに受け継がれる。正志斎は宣長の非政治性を批判し、考証主義と「道」との矛盾があることを指摘して、「国体」による明確な規範を示そうとした。他方、東湖も同様に国学の考証主義と「道」の矛盾を批判したが、正志斎とは異なり、「神道」概念の再構築を摂取して「斯道」という概念による新たな神儒一致論を提示した。

第 8 章では明治期における『正統記』の受容史について考察する。慶応 2 (1866) 年に刊行された川喜多真彦の『評註校正神皇正統記』を起点として、明治期に入ると数多くの刊本や注釈書が刊行されるようになる。とりわけ明治 20 年代以降、近代国語教育の確立に対応して出版された刊本・注釈書を手掛けたのは、考証派を中心とする明治国学の人々だった。彼らの解釈の特徴は、「国体」の書という後期水戸学以来の解釈を引継ぎつつ、明治 15 (1882) 年を転機とする教学分離を背景に、日本神学と『正統記』の「宗教性」を分離するということにある。それは、明治国学者と密接に関わっていた井上毅の『正統記』解釈とも共通する。「神道」から分離された日本神学は、井上が関与した大日本帝国憲法や教育勅語にも生かされたのである。

以上のように『正統記』受容史をたどってきた結果明らかになるのは、近代における「国体」の書としての『正統記』の復権は、近世における知の集積の上に成り立っていたということである。『正統記』は元来多様な解釈が可能なテキストであったが、それは歴史主義の興隆という知

の布置の変動と社会状況の変化を経て、「国体」の書として再定義されることにより、近代国民国家としての日本に適合的なものとなったのだった。それは同時に近代日本にはそぐわない『正統記』の側面を切り落とすことでもあった。

一方で歴史主義の興隆は日本神学の解釈をも変化させた。歴史主義は普遍的理法に還元できない日本の本来性に目を向けさせ、そこから国学も形成される。しかしそれは他面で国学における考証主義と「宗教的」な「道」との矛盾を生じさせる。そこで後期水戸学と明治国学の人々、そして井上毅が共通してとった解決策は、「宗教的」な「道」と「国体」にもとづく倫理との分離、いいかえれば「神道」からの日本神学の分離であったのである。